

CSW 報告 2月28日

【日 付】2月28日、10:00～11:30

【場 所】CCUN 2<sup>nd</sup> Floor

【題 目】Allies: How Public-Private Collaborations Can Combat Child Sex Tourism

【主催者】ECPAT-USA

【形 式】パネルディスカッション

【発表者】Amaya Renobales Barbier (ECPAT-USA ツーリズムで子どもを守るプロジェクト・ディレクター、Amy O'Neill Richard (米国国務省人身売買監視対策室シニア・アドバイザー)、Jennifer Silberman (Hilton Worldwide グローバル企業責任部部長)、Julie Tanner (CBIS 社会的責任投資アシスタントディレクター)、Katerina Karousos (米国内務省 Ice Homeland Security Investigations 搾取犯罪捜査班長)

【内 容】子ども買春、子どもポルノ、子どもの性目的の人身売買を根絶するためには、政府、企業、市民社会、司法、警察など様々なアクターとの協力関係が欠かせない。パネルにはECPATのプロジェクト担当者、米国政府から国務省人身売買対策室アドバイザー、民間企業からヒルトン・ホテルと、社会的責任投資会社の担当者、そしてICE Homeland Security Investigations から犯罪捜査官と、各界の代表が参加していた。モデレーターでECPAT-USA エグゼクティブ・ディレクターのCarol Smolenskiの挨拶に続いて、ECPATから観光地における子どもの商業的性搾取根絶を目的としたコード・オブ・コンダクト(子ども買春防止のための旅行・観光業界行動倫理規範)の内容説明があり、米国国務省の担当者からは、毎年的人身売買報告書の発行を始め、ヒラリー国務長官以下この問題に熱心に取り組んでいる様子が紹介された。ヨーロッパ諸国と比較してアメリカの旅行業界でコード・オブ・コンダクトに参加する企業は極めて少数であり、その中でヒルトン・ホテルは大手の多国籍企業として貴重な存在である。社員への研修など取り組みはまだ始まったばかりであるが、客が部屋の中で見る映像の内容などプライベートな領域にはホテル側も踏み込むことができないなど、限界も指摘された。社会的責任投資とは日本にはあまり馴染みのない概念であるが、子どものセックスツーリズムに関与する企業は二度と利用しない、またコード・オブ・コンダクトに参加するよう呼び掛ける葉書を送るなど、消費者としてささやかでも影響力を行使することができる、というのは今後の活動のヒントとなるだろう。最後に法執行面に関して、関連法規や子ども被害者の裁判やそのサポート方法について課題と事例報告があった。

【感想】日本では子どもの人身売買の事例は少ないと思われるが、子どもポルノの発信国として世界的な非難を浴びており、またいわゆる援助交際など子ども買春も後を絶たない。インターネット、携帯、ソーシャルネットワークサイトなどIT技術の発達によって子どもが日々性搾取の危険にさらされているのに、親や学校の危機感が薄いように思う。子どもの商業的性搾取の問題は、世界Y・日本Yともに重要課題とは言えないが、関連のあるテーマでもあるので、アドボケートしていきたい。また、ファンドレイジングのために自然化粧品品のBODY SHOPと提携してハンドクリーム(日本のECPATでも全く同様のキャンペーンを行っていた)や、フェアトレード認証のラゲージタグを販売していた。付加価値のあるグッズ販売はファンドレイジングのアイデアとして、今後の参考にしたい。(吉田)

【日 付】2月28日、13:15

【場 所】UN North Lawn Building Conference Room B

【題 目】Empowerment of Women in Rural Japan

【主催者】International Women's Year Liaison Group (38 organizations), National Women's Committee of the UN NGOs, JAWN (Japan Women's Watch), 国連代表部

【発表者】坂東真理子、江尻美穂子、篠崎正美、降矢セツ子、中道仁美、榎本裕子、岡部佳世、原ひろ子

【内 容】坂東真理子さんの司会と、江尻美穂子さんのお話で始まった。1人目のパネリストである篠崎正美さんは、日本における地方の女性の現状と挑戦について具体的な数字を交えて話された。2人目のパネリスト、降

矢農園の取締役である降矢セツ子さんは、ご自身の農家の嫁としての経験について話され、地方の女性も自ら行動し、立ち上がるべきであるということをお話された。3人目のパネリストの中道仁美さんは、現代の漁業における日本人女性の地位と問題についてのお話をされた。最後のパネリストの榎本裕子さんは“ Japan's International Cooperation related to Women's Empowerment in Rural Community ”という題でお話をされた。その後、岡部佳世さんと原ひろ子さんからのコメントがあり、参加者の質問に入った。

【感想】自分が住む国の話でありながら、初めて知ることもあり、驚くと同時に、もっと学ばなければいけないと感じた。地方というと、過疎化や高齢化の問題がよく取り上げられるが、女性という視点からも、地方の方々や環境について、知り、その現状を多くの人を知るために広めていかなければならないと思った。また、今回のイベントの発表は主に、日本の地方についてであるが、限られた地域や国だけでなく、世界のさまざまな地方に住む人々や女性についても、より情報を集め、共有し、悪い状況であるならば、それを打開するための方法をさまざまな国や人からの視点で考えられるようになるようにしていかなければならないと感じた。(小山)

【日 付】2月28日、16:00

【場 所】CCUN Drew Room Ground Floor

【題 目】Intergenerational Learning and Conversations on Education for Girls: A Tool for Empowerment

【主催者】World YWCA

【発表者】Bonnie Fatio, Raechel Matthews

【内 容】Age Esteem が主要テーマとなっており、違う世代の人同士が、自分の、そして相手の世代・年齢を尊重して交流し、また世代を超えたリーダーシップを持つためにはどうすべきであるのかを話し合った。ポニーによる、人々が知らないうちに持ってしまう‘ Young ’と‘ Old ’バイアスの実験と話から始まった。Age Esteem や Intergenerational Leadership というテーマに沿って、さまざまな参加者の考えや経験を聞いていき、最後には、“ How can we work together more effectively? ”という問題が提起され、5~6人ほどの小グループで話し合った。その後、話し合いの結果を発表し全てのグループの話をみんなで共有した。

【感想】私たちは知らず知らずの内に、何かに対して先入観を持ってしまうことが多々ある。今回のイベントでは、若い人々と年を重ねた人々に対する偏見・ステレオタイプを私も持ってしまうことを認識した。若い人々は素早く、美しい。年を重ねた人々は賢いがゆっくりとしている。こうした考え方を人は意識せずにしてしまいがちだが、そういったイメージにとらわれることなく、違う世代同士が互いを尊重しあい、互いの話を聞きあうことは重要であると感じた。また、若い人々にリーダーシップを与えることの大切さも学んだ。若い世代にリーダーとなるチャンスを与え、間違っている時や、滞ってしまった時には、経験のある年上の世代が、アドバイスを与え、正しい方向に導く。こうして若い世代に考えさせ、多くの経験をさせ、教育し、鍛えていくことが Intergenerational Leadership の育成であり、本質であると感じた。(小山)